

國學院大學學術情報リポジトリ

2020年度国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-16 キーワード (Ja): NDC8:302.1 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001625

雪、妖怪、ゆるキャラ —北越雪譜と越後のアイデンティティについて—

ドリュウ・リチャードソン

(カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校)

[日本語版作成協力・大場あや]

1770年に生まれ1842年まで生きた鈴木牧之は、その著作である『北越雪譜』の中で、雪そのものと雪に関する様々な事柄について書いた。その内容には、科学的に観察された雪片の形、雪虫、霜の悪魔、そして織機のカミ様が含まれている。牧之の『北越雪譜』——英題は*Snow Country Tales: Life in the Other Japan* と訳された——は、自然と超自然の雪を徹底的に観察することの特徴とする百科事典的作品である。山東京伝、岡田玉



雪虫（北越雪譜いろはかるた）

山、鈴木芙蓉、曲亭馬琴、山東京山など、江戸の文学者との40年近くの交渉の末、特に山東京山の協力を得て、京山の執筆部分をも含む形で1837年に『北越雪譜』が江戸で出版され、高い評価を得た。アン・ウォルソール（Anne Walthall）によれば、『北越雪譜』は、江戸の読者に、越後の生活が江戸の生活とは根本的に異なっていることを示したいという、北越出身の牧之による熱烈な願望から生まれた「雪の百科事典」である。さらに、ウォルソールは、「雪国においては、まず寒くて厳しい環境で生き残る必要性があり、彼らの住む家の建築様式、食生活、諸々の習慣、家内工業、そして考え方などは、全てそこから決定されている」と述べている（Walthall XLV）。牧之は、豪農、つまり裕福な農民だったため、周囲の村の人々の話を集めて民俗誌的記述をただけでなく、無数の旅行者を歓待して、そうした旅行者達から様々な話を収集する機会があった。彼は近くの村の地元の人々の話を集め、そして生涯にわたって何千通もの手紙を書いた。手紙を出した文通相手は多様であり、その中には動植物や漢方薬の研究に興味を持っていた本草学者たちも含まれていた（Marcon 180）。

牧之は雪国に暮らすことの困難さや、またそこでの生活が江戸のそれとは異なっていることを捉えようとしていた。そのため、夏の快適な時期にしか雪国を訪れたことのない、冬の試練を全く知らない旅行者達について、また彼らが雪国についての誤った情報を広めていることについて、しばしば読者に苦言を呈している。森山武は、牧之の「初雪」の章は、牧之のこれらの感情を示している、と述べている（Moriyama *Crossing Boundaries in Tokugawa Society* 3）。

雪の儚さ——降り、溶け、そして消える——は、日本の詩歌に広く見られるイメージで

ある。ある意味で、雪は冬の桜ともいうことができる。雪を美的に捉えて評価することに對する牧之の批判は、彼自身、詩的なものへの憧れが強いことを考えると、特に驚くべきことだ。牧之は歌人の手紙を集めるだけでなく、大規模な和歌のコンテストを開催している。しかし、繊細なつららをテーマにした詩に對して、牧之は「我国の垂氷に比ふれば水虎の一屁也と心にをかしとおもひし事ありき」と皮肉って評している（Suzuki *Suzuki Bokushi Zenshū Volume 1* 119）。つまり、牧之にとっては、つららは雪国でごく普通のものであり、つまらないもの、ということになるのである。このように、牧之は、自らコンテストを開催するほど和歌や詩への憧れの気持ちが強いにもかかわらず、雪国の事柄についての詩については辛辣なコメントをしており、ここに牧之の雪国に對する思い入れの強さを見てとることができる。

『北越雪譜』を執筆した牧之の意図は明確だ。モリヤマによると、1807年の手紙で牧之は、雪国に住む人々の生活についての本を出版し、雪の中で生きるということがどういうことであるのかを、全国の人々に——もちろんその著者である自分の名前と合わせて——知ってもらいたいと述べているという（Moriyama 211）。また、高橋実によると、牧之は山東京伝に初めて手紙を書く際に、江戸の読者に雪の世界の生活と、雪のその物質としての重さを理解してもらうために、出版される本にはいろいろな雪国の生活に用いられる道具の詳細な絵を含むべきであると述べていたという（Takahashi *Hokuetsu Seppu no Shisō* 94-95）。

牧之の執筆目的は明らかだが、『北越雪譜』は内容と文体・目的において、二つの部分が混ざっている。まず内容について、一つは民俗学的な、つまり雪国での生活に関する民俗誌的な部分であり、もう一つは、超自然的なものについての部分、つまり不思議な現象、幽霊や化物との遭遇についての部分である。また、二種類の文体・目的について、牧之の書いた章は、教訓を含んでいて、真面目な印象があるが、京山が書いた章は言葉遊びがあり、内容も異なるように見える。ただし、『北越雪譜』において、牧之と京山が、どのような形でお互に関わっていたのかは、はっきりわかっていない。つまり、書籍の全体に京山の影響がどのぐらいあったのかについては、依然として分かっていないのである。これについては後述する。

個々の章の内容について、雪国における日常生活の事実の描写と、惨事や恐怖、超自然についての物語的叙述が交互に繰り返される形式がとられている。後者の物語的叙述はセンセーショナルなことを取り扱っており、雪崩によって首が切断されてしまうこと、異常な吹雪の中での突然死、雪中での幽霊や「泊り山の大猫」との遭遇、山男（異獣）とのやり取りなどが含まれる。例えば「菱山の奇事」の章は、夜に、白衣を着た長い白髪の神々しい老人が、御幣を高く掲げ持って、雪崩に乗って降りてきた、という話である（Suzuki *Zenshū* 87）。この雪崩が下る方向によって、その年の豊凶が決まったということである。

京山が書いた部分は、「百樹曰く」という文から始まる。ウォルソールは、京山が江戸の読者の関心に合わせて、目を引くような驚異に満ちた記述を含めたことを批判した。ウォルソールによると、これらの部分には、きなこをかけたかき氷を食べることについての気

の利いた説明、天ぶらのユーモラスな、しかし誤った語源についての話、中国での狼への変身についての悲惨な話などが含まれている（Walthall XLIV）。確かに、京山の書いた部分は、主題や文体の点で牧之の書いた部分とは大きく異なる。京山の物語には、手の込んだ洒落や遊び心のある言葉が含まれていることがよくある。それらは、深刻な話ではなく、軽くてユーモラスであり、そして重要なことに、必ずしも雪国に関係しているわけではない。

高橋は、ウォルソールの批判をさらに展開させ、「百樹曰く」と記されている部分だけでなく、テキスト全体にこのような超自然的な物語が含まれていることを指摘している。これについて高橋は、雪についての話の素材が尽きたか、あるいは読者の注目を集めるには『北越雪譜』を不思議な物語というジャンルに合わせる必要があったのではないかと推測している（Takahashi 14-16）。

一方、モリヤマは、雪国の民俗誌のような記述と、超自然的な物語との対比について、「北越雪譜の内容も、より多くの読者を惹きつけるために、書くべきトピックを提案した京山によって強く支配されていた」（Moriyama 240）と見ている。都会の編集者である京山の側にも、江戸の読者に雪国をどのように紹介するかについて、強い意見があったという考察である。京山が加えることを提唱したセンセーショナルな主題には、雪の中で熊を狩ることや、吹雪の中での旅行者の死、また越後の七不思議についての話などがある。このような観点から見ると、京山と牧之は共同執筆者であり、一冊の書籍の中に雪国に対する二つの見方が示されていることになる。

牧之が出版交渉を行った40年の間に、雪国に関する他の作品が出版されている。1812年に、橘崑崙が執筆し、葛飾北斎がイラストを描いた『北越奇談』が出版されたが、これは成功とは言えなかった。『北越奇談』は、超自然的な内容だけを取り上げており、牧之は「一辞半言も雪の事をしるさず」と評している（Takahashi 10）。『北越奇談』とは対照的に、牧之は、超自然的なものについての話だけではない形で、雪国に関する読み物を出版したいと考えていた。彼は、流刑地、あるいはあらゆる種類の妖怪が歩き回るような未開の地ではなく、それ以上のものとして、雪国を描きたかったのである。しかし、それにもかかわらず、『北越雪譜』には多くの超自然的な物語が含まれている。

『北越奇談』と『北越雪譜』を比較することによって、雪国の超自然についての表象がどのように変化していったのかを、わかりやすく理解することができるだろう。『北越奇談』の他、初期の多くの作品において、越後国は未知の、そして未踏の不思議な場所として描かれている。未知の場所は空想や想像を膨らませるのに適しており、あらゆる種類の不思議な物語と超自然の舞台となっている。ただし、北越を未知の場所として描き、利用することは、その段階で北越に強い地域アイデンティティが確立していなかったからこそ可能



雪中の幽霊（北越雪譜いろはかるた）

であったということができる。あらゆる種類の荒々しい超自然的現象を想像することができるのは、越後についてほとんど知られていないからである。その意味で、越後は他の遠く離れた未知の場所と何ら変わりはない。

しかし『北越雪譜』では、そこに描かれている超自然の性質が大きく異なっている。牧之は雪国の日常生活や風習を詳しく解説しているのだから、「不思議」ではあっても「未知」のものではない。その代わり、『北越雪譜』に登場する超自然は、この地域の特徴である雪と結びついている。雪崩、機織り部屋のカミ、雪の中の巨大な獣や幽霊の足跡などの物語は、すべて雪の中での生活という地域的アイデンティティに関連している。つまり超自然と、その生息地である雪国とが密接につながっているのである。

現代の日本を考えると、妖怪とふるさとをつなげたり、または「ゆるキャラ」と地域観光を結びつけたりすることが盛んに行われている。牧之の『北越雪譜』における試みは、妖怪や化け物を、ある特定の地域に結びつけて考えるという、現代にまで引き継がれている大きな潮流の始まりを表しているということができる。

南魚沼は日本の「ゆるキャラ」等の創造に重要な役割を果たした場所だが、『北越雪譜』が今日の南魚沼の「ゆるキャラ」のモデルになったと、明確に示すことはできない。民俗学の発展は、日本の様々な地方を顕在化させるのに重要な役割を果たしたが、遠く離れた周辺地域を、現地の住民ではない外部の「よそ者」が描写するという点において、旅行文学と同様の問題をしばしば抱えていた。民俗誌を作成する民俗学者と、彼らに情報を提供する現地のインフォーマントの関係は不平等であり、現地住民であるインフォーマントは、自分の住む地域がどのように描写されるか、全く関与できない場合もあった。有名な例として柳田国男の『遠野物語』がある。『遠野物語』は、遠野とその伝統についての関心を高めたが、柳田は、その著述の素材を作家志望であった佐々木喜善による語りに頼る一方で、序文では佐々木を素朴な現地のインフォーマントとして登場させている。これは『遠野物語』の信憑性を高めるためと思われるが、しかしそうすることによって、柳田との合作を望んでいた佐々木の希望を打ち砕き、また佐々木自身のものとは異なる遠野のイメージを提示することになったのである。

民俗学において、女性と子どもは理想的なインフォーマントとして好まれた。おそらく家庭や日常生活に、より関係しているからであろう。そして女性と子供は嘘をつくことなく、事実をそのまま説明してくれると考えられていた。一方、日本の民俗学者にとって、作家は最も悪いインフォーマントである。作家は文学的な追究をするあまり、日常生活のリアリティを歪めて伝えると考えられていた。

そのため、柳田は鈴木牧之と『北越雪譜』を無視したのである。柳田は、山東京山が全て『北越雪譜』を書いたに違いないと考えていた。柳田は、『北越雪譜』は京山が全て書いたものであるため民俗誌の研究には向かないと低く評価したが、次第に民俗学の分野において、牧之による雪の下での生活の克明な描写は、研究の対象とされるようになった。

1936年にアチック・ミュージアムは、『北越雪譜』の詳細な索引を研究者向けに作成した。この索引は、川端康成の有名な小説『雪国』の出版に伴って発行された。『雪国』は、1935年から1937年まで連載された小説である。高橋は『北越雪譜の思想』において、牧

之の日常生活の描写が、この小説に与えた影響は大きいと論じている (Takahashi 6-7)。言うまでもなく、南方熊楠が1896年に『ネイチャー *Nature*』誌に投稿した越後の奇妙な音についての論説にも『北越雪譜』が利用されていた。

『北越雪譜』が地域のアイデンティティに影響を与えた3つ目の大きな出来事は、日本国有鉄道(「国鉄」)による「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンと、それに続く「ふるさとづくり」に主導された国内観光の発展である。マリリン・アイヴィー (Marilyn Ivy) によると、1970年代の同キャンペーンのポスターには、常に田舎の村や神社、誰もいない駅などが描写されている一方で、場所を特定できるような目印は省かれ、どこかはっきりわからないようになっていた (Ivy 1)。そのポスターの見せた故郷は、全ての日本人の故郷になった。ディスカバー・ジャパンのメッセージは、例えば新潟に来れば「昔の日本」を経験できるということである。都会で生まれても新潟や遠野はあなたの本当の「故郷」であり、日本人の故郷である。日本の心を理解するため日本を旅行しようというメッセージだった。

「故郷」には、多くの意味が重ねられている。まず、故郷は空間的に「都市」の反対である。そして、この対比は、空間的なものだけでなく、時間的なものでもある。時間的には、「現代」の反対、そして個人の「子ども時代」という2つの意味も含まれる。つまり、一方では日本の伝統的なムラ社会や祭りなど、前近代の農業を中心とした生活様式を想起させ、他方では、個人の過去といったような意味も含まれる。優しい母親像、昔の地域や近所の人々など、幼少期の思い出が結びつけられるのである。

また、「故郷」という概念の幅広さや、子ども時代との関連性は、日本の妖怪のイメージとも類似している。子どもの時分には真正なものとしてあった懐かしく、古いものの象徴として、故郷と妖怪は密接な関係にある。故郷とは妖怪が住む場所でもある。そして柳田の『遠野物語』によって、遠野は故郷のイメージの場所になった。

そして、他にも妖怪が住む場所がある。マンガ家で妖怪研究者の水木しげるの出身地である鳥取県境港市は、最も有名な妖怪の町である。1990年代以降、境港の評判が広がり、「妖怪の故郷」になった。境港には、水木の作品に登場するいろいろな妖怪をかたどった真鍮の像があり、妖怪グッズを販売する店や、水木のマンガを展示する「水木しげる記念館」もある。これらが並ぶ通りは「水木しげるロード」と名付けられた。また、境港行きの電車にも、水木が手がけた有名なキャラクターが色鮮やかに描かれている。

水木しげるロードは、妖怪を求めている他の場所にも影響を与えた。南魚沼市では、旧三国街道が「牧之通り」として整備された。この「牧之通り」は、「三国街道沿いの江戸時代の宿場町を再現した」とされている (“Bokushi Street” The Snow Country Tourist Zone)。そして、店の隣に木造の歩道がある。その道には木造の屋根もある。このデザインは『北越雪譜』の記述に似ている。

『北越雪譜』に登場する雪片の形は、道に沿って埋め込まれたタイルに再現されている。店や博物館、レストランの壁には、『北越雪譜』の黄ばんだページが保護フィルムに入れられて掲示されている。また、自動販売機にも、ページが埋め込まれた小窓が設置されている。

「牧之通り」を歩くことは、『北越雪譜』に登場する習俗や生物を、現代の塩沢という空間に描いていくことになる。「牧之通り」を散歩すると、『北越雪譜』を読むことになるのである。

『北越雪譜』における妖怪や超自然的な要素は、近年、地域のマスコットキャラクターやふるさと観光の人気に伴い、再び注目を集めている。『北越雪譜』が刊行されてから、同著と地域ア



牧之通りの標識



牧之通りの風景



『北越雪譜』のページが埋め込まれた自動販売機

イデンティティの関係については、様々な展開があったということが出来るが、しかし、おそらく最も重要な出来事、すなわちその後の展開の出発点となったのは、想像力と表現力における変化であっただろう。

『北越奇談』と『北越雪譜』とを比べるならば、前者では謎めいた見知らぬ場所における未知の超自然現象が描かれているのに対して、後者では既知の超自然現象——つまり雪国という場とその生活様式に密着したものとして描かれ、説明された超自然現象——が描かれているということが出来る。つまり、『北越雪譜』においては想像力の再構成がなされているのである。

また、現地の人々が自らの暮らす場所を文学において示すという表現力を手に入れたということも重要であった。牧之のような地元の間人が、自分の故郷を巧みに描くことができるのは珍しかっ

た。通常、遠く離れた場所を表現するのは、著名な作家や旅行者であることが多いからである。牧之の表現力は、雪国の生活の特質と、それがどのように江戸のそれとは異なっているかを、江戸の読者に提示することができた。また、それによって牧之は、読者が——上述した雪国における既知の超自然現象を前提とした上で——雪国を新たな地域として想像する余地を提供したのである。

参考文献

- “Bokushi Street,” The Snow Country Tourist Zone, accessed May 28th, 2019. <https://snowcountryblog.wordpress.com/2015/12/16/bokushi-street/>
- Federico, Marcon *The Knowledge of Nature and the Nature of Knowledge in Early Modern Japan*. Chicago: Chicago UP, 2015.
- Ivy, Marilyn. *Discourses of the Vanishing: Modernity, Phantasm, Japan*. Chicago: Chicago UP, 1995.
- Moriyama, Takeshi. “Communicating Provincials: The Correspondence Network of Suzuki Bokushi (1770–1842)” , *Japanese Studies*, 29:1 (2009): 47–63.
- . *Crossing Boundaries in Tokugawa Society: Suzuki Bokushi, a Rural Elite Commoner*. Leiden & Boston: Brill, 2013.
- Suzuki, Bokushi. *Kōchu Hokuetsu Seppu (revised)*. Sanjo, Niigata: Nojima shuppan, 1993. (鈴木牧之編、井上慶隆・高橋実校註『校注北越雪譜（改訂版）』野島出版、1993年)
- . *Snow Country Tales: Life in the Other Japan*. Trans. Jeffrey Hunter with Rose Lesser. New York & Tokyo: Weatherhill, 1986.
- . *Suzuki Bokushi Zenshū Volume 1*. Eds. Miya, Eiji, et al. Tokyo: Chūōkōron sha, 1983. (宮榮二他編『鈴木牧之全集・上巻』中央公論社、1983年)
- Tachibana, Konron. *Hokuetsu Kidan*. Sanjō, Niigata: Nojima shuppan, 1978. (橘崑崙『北越奇談』野島出版、1978年)
- Takahashi, Minoru. *Hokuetsu Seppu no Shisō*. Niigata: Koshi shobō, 1981. (高橋実『北越雪譜の思想』越書房、1981年)
- . *Zayū no Suzuki Bokushi*. Sanjō, Niigata: Nojima shuppan, 2003. (高橋実『座右の鈴木牧之』野島出版、2003年)
- Toyosawa, Nobuko. *Imaginative Mapping: Landscape and Japanese Identity in the Tokugawa and Meiji Eras*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2019
- Walthall, Anne. “Introduction” to *Snow Country Tales: Life in the Other Japan*. New York & Tokyo: Weatherhill, 1986.
- Wigen, Karen. *A Malleable Map: Geographies of Restoration in Central Japan, 1600-1912*. Los Angeles: California UP, 2010.
- Yonemoto, Marcia. *Mapping Early Modern Japan: Space, Place, and Culture in the Tokugawa Period (1603-1868)*. Los Angeles: California UP, 2003.